



題字：書道家 平田 洋香

第 41 号

発行日：令和3年10月15日
発行：一中地区市民委員会
編集：文化広報部会
事務局：一中地区公民館内
TEL：029-821-0104
世帯数：9,360戸
人口：19,161人
(令和3年9月現在)

持続可能な学校づくり



土浦第一中学校
校長 奥谷 克二

土浦一中は、創立七十五周年を迎える歴史のある学校です。私たちに、その伝統を未来につなぐ責任があります。予測不可能な未来を生き抜いていく子どもたちのためにも、社会の変化を受け入れ成長し続ける学校をつくるのが求められています。

少子高齢化・グローバル化・情報化など急激に変化する社会に対応するためには、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を実現するという目標を、学校と地域社会が共有し、連携・協働しながら新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育むことが大切です。

中学校でも、今年度から新しい学習指導要領に基づき教育活動が進められています。その中心は、「社会に開かれた教育課程」の実現にあります。これは、学校だけでなく家庭や地域の力を借りて、社会に貢献できる人材をみんなで育てていくという考え方です。

そのためには、土浦市の様々な人々を学校に招いて学習したり、公

民館や博物館などの地域の教育的資源を積極的に活用したり、あるいは社会教育と連携したりして、子どもたちが地域社会の中で学ぶ機会を創り出すことが必要です。育てたい子どもたちの姿を明確化し、学校・家庭・地域が一体となった取組を進めていきたいものです。

また、これからの学びを支えるICTや先端技術の効果的な活用も必要になってきます。GIGAスクール構想の実現により、一人一台のコンピュータ端末や高速大容量通信ネットワーク環境の整備がなされ、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善も更に進展しています。今後は、オンライン授業や一人一人のニーズや状況に応じた個別学習、即時に情報を共有し、多様な意見にも触れることができる協働学習なども充実することが期待されます。

今は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、教育活動が制限されています。その様な中でも、学びを止めないように創意工夫しながら、学校行事や学習を進めています。これから、社会の変化を前向きに受け止め、地域の皆様と共に持続可能な学校づくりに取り組んでいきたいと思っています。

未来を生きる子どもたち



土浦第二小学校
校長 稲田 弘之

「おはようございます」

あいさつ運動の児童はもとより、委員会の朝の活動をしながらあいさつをする児童など、たくさんのおいさつで一日が始まります。

土浦二小には、毎年、子どもたちが話し合って決める『二小の目標』があります。

今年の目標は、次の二つです。

新しい一歩を踏み出す輝く学校仲間を大切に

笑顔の花が咲き誇る学校

これらの目標は、全ての児童が関わり、学級や学年で自分たちの思いを込めて案をつくり、代表委員会決定していきます。さらに、決定した目標を学年・学級、委員会活動に下ろし、それぞれの立場でその目標を具現化するための行動目標を立てます。このようにして、児童が主体的に決定することで、全ての児童が『二小の目標』を自分のものとして考え、さまざまな活動に取り組んでいます。

その他にも、コロナ禍での外遊び

の仕方に課題が見られると、解決の方法を各学級で話し合い、それを持ち寄り教職員も一緒に解決策を考え、決定し、実践してきました。

このように、「自分で考え、判断し、行動する」という機会を意図的に設け、経験を重ねることを通して、児童の主体性を養っています。

また、授業や学校行事など全ての教育活動において、「友達のためにや学校のために」を意識させることで『自己有用感』を高めることを目指しています。

行事の係の活動で他者を考え行動したり、授業で自分の考えを伝えて友達とともに成長しようとしたり、その他、委員会活動で、登校班で、など様々な場面で「友達や学校のために」頑張る姿が見られます。このようにして児童一人一人の『自己有用感』を高め、良好な人間関係を構築し、未来を力強く生きていく力が育つと考えます。

土浦二小では、PTAや講演会、おやじの会など保護者や地域の方々と教職員が力を併せて「チーム二小」として教育活動に取り組み、コロナ禍の先にある無限大の可能性を秘めた未来を力強く生きる子どもたちを育成しております。

楽しみながら

一中地区市民委員会

委員長 吉田 宗義

今年は家庭菜園はやめようと思いつながらもホームセンターなどに出かけるというついでに野菜や花の苗を見ては購入してしまいました。うまくいくときも失敗する時もありますが、収穫出来た時の達成感でしょうか、これが忘れられずにまた初めてしまふんですね。また私のいとこの娘が数年前から趣味の菜園を友達とはじめて、今では仲間も増えて楽しくやっているのを聞いたり、SNSを見て感動したり、そうしたこと刺激を受けているのかもしれない。家の近くに小さな畑があるのでこれまでそこで栽培していたのですが、最近カラスなども多くスイカなどそろそろ収穫かなと思いついてみると殆ど食べられてしまっているんです。それを見て思いました。私よりカラスの方が食べごろもわかっているし賢いと正直がっかりです。

そんなわけで今年は少しだけ庭隅やプランターに植えてみました。毎朝水をやり暑いときには夕方にも大事に育てたつもりでしたが、バナナの

木も育つものの実がつかないようです。まだまだ勉強不足、思い通りには出来ないですが、県外にいる孫たちにも興味をもってもらえたら嬉しいし、食べてもらえるのを楽しみにしていたのですが、コロナ禍ということで今年の夏休みも帰ってこれず残念。来年こそ遊びに来られることを信じて、また家庭菜園に挑戦したいと思うとともに、早く新型コロナウイルス感染症が終息することを願っています。



環境部事業報告



一中地区市民委員会
環境部長
富田 祐

令和三年に入るも新型コロナウイルスの感染拡大に歯止めがかからず、また更なる感染力が強い変異株が猛威をふるっている状況になっています。

本年度に入るも度重なるまん延防止重点措置・緊急事態宣言の発布により五月に申請予定の打合せ会議が中止になり書面会議となりました。書面会議では令和二年度事業報告および令和三年度の事業計画案等が提

案され議案すべても承認されました。

※令和二年度事業

- ・打合せ会議 書面会議にて実施
- ・花火大会後の清掃活動 中止
- ・公民館まつりへの参加 中止
- ・ポイ捨て看板の設置 中止
- ・視察・研修 中止
- ・花いっぱい運動参加 通年にて

※令和三年度実施計画

- ・打合せ会議
- ・花火大会後の清掃活動
- ・公民館まつりへの参加
- ・ポイ捨て看板の設置
- ・花いっぱい運動への参加
- ・視察・研修

令和二年度の事業は、打合せ会議が、書面会議になり、花いっぱい運動への参加以外は中止になり残念な一年となりました。

令和三年度の事業も打合せ会議が書面会議になり早々と公民館まつりも中止となりました。新型コロナウイルス終息が見通せないなかで他事業の実施も見通せない深刻な状況になっています。

この危機的な状況を克服べく三密を避け、マスクの着用を徹底し、またコロナワクチンの接種により一日でも早く穏やかな日常が戻ることを願います。



岡本太郎現代芸術賞に入選

昨年十一月に、土浦市中央一丁目の矢口酒店が実家の、矢口祥（あき）子さんの作品が、六百十六点の応募の中から「第二十四回岡本太郎現代芸術賞」に入選しました。

今春に川崎市岡本太郎美術館で授賞式と作品展示が行われました。

矢口さんは、平成二十七年に手書き新聞型イラストエッセイ「矢口新聞」第一号を発行し、ご自身の日々の暮らしのエピソードや土浦市内のお店の紹介等六年間で二百三十二号を発行しました。



田中編集副部長

矢口祥(あき)子さん



「第24回岡本太郎現代芸術賞」(2021年2~4月 川崎市岡本太郎美術館提供)

「亀城」編集副部長の田中久美子さんが矢口さんにお話をお伺いしました。(五月十八日、城藤茶店にて取材)

田中：入選おめでとうございます。

矢口：有り難うございます。

田中：「矢口新聞」は、どのようなキッカケで始めたのですか？

矢口：東日本大震災です。今までの自分が本当に心の奥からやりたい事をやって生きていなかったことに気付かされました。当時、TV・ネット中毒で、電気が自由に使える生活に感謝していなかった。少しずつ便利な物（携帯電話・PC・TV等）を手放しアナログ生活を始めました。

田中：東日本大震災から平成二十七年の「矢口新聞」創刊までのことを聞かせてください。

年の「矢口新聞」創刊までのことを聞かせてください。

矢口：二十二年間務めた地元の会社を辞めました。その後、都内の着付け教室やイラスト教室へ通い始めて、暫く会っていない友人に手紙の代わりにイラストを送ったのが、「矢口新聞」の始まりです。

田中：「矢口新聞」には、「かえる」と「こけし」が登場しますね。

矢口：「かえる」は、自分が変われば周りも変わる、人生やり直して復活のするぞという思いで作った私の分身です。(矢口さんは「かえるかわる子」を名乗って活動している) 筑波山のホテルでアルバイトしている時、若い観光客が「四六のガマ」を知らないことに驚き選びました。

私の分身である「かえる」だけでは寂しいので相棒として作ったのが、土浦名産のレンコンの「こけし」です。

田中：「岡本太郎現代芸術賞」に入選しての展示はどうでしたか？

矢口：電車に乗って二時間半かけて通い在廊しました。子どもの壁新聞みたいだねえと言う方が九十パーセント程いました、長時間じ〜と呼んでファンになってくれる人もできました。

田中：展示名は「土浦の情熱『矢口新聞』」ですが、その思いは？

矢口：土浦を中心に水戸街道が水戸から東京まで人々の交流が生まれ、土浦の街が元気になって欲しいです。「矢口新聞」の本も出版したいです。

田中：有り難うございました。

(お知らせ)
ご実家「矢口酒店」での展示会が、十一月六・七日の十二時〜十五時に行われます。



文京町地区長
桐原 利之

就任直後、区長の仕事の大変さを思い、果たして後期高齢者の私が引き受けていいものを悩んでいるとき、二組の若いご夫婦が「町内会に加入したい」と尋ねてくれました。

これは心強かったです。まだまだ町内会という組織を大切に思ってくれる若い方々がいるのだと思うことができ、背中を押してもらいました。その後もご高齢ご夫婦も加入してくれました。

御多分に漏れず、文京町も少子高齢化の波を受け子どもたちがどんどん少なくなってきました。地域で子育てなど言われて久しいですが、文京町としても遅ればせながらこの思いを伝えようとお子さん方に何かできないかを役員で話し合い、とり



2021.7.24 文京町育成会ちんどんパレード

少子高齢化社会の中、町内会運営

あえず二つのことを考えつきました。

一つは、お年寄りには敬老の日に商品券をお贈りしているのと同じようにお祝いとして記念の品を新生と新中一年生（七年生）に贈ることになりました。

二つ目はコロナ退散を願い、また、コロナで鬱積した日々を送っているだるうお子さん方を励ます意味も含めて、七月二十四日、祭りの代わりに副区長の石原さんがやっている寿ちんどん宣伝社にお願いし町内をチンドンパレードで回ってもらいます。

は今まで通りにはいかないであろうことは重々考えています。思いつくだけでも、お祭りの問題（お囃子はどう伝えていくかなど）、育成会の問題（付随する廃品回収をどうするか）などなのです。

同好会だより

釜の会について

釜の会会長 堀内 俊夫

釜の会は、茶の湯の習得と会員相互の親睦を目的としています。

会員は、現在女性三名、男性一名です。茶の湯の設備のある一中地区公民館の和室を利用し、月二回、木曜日の午後にお手前のけいこをしています。

茶の湯の指導は、公民館の近くで表千家茶道を教えていらつしやる佐賀先生にお願いしています。

毎回のけいこは、お手前の準備から始めます。全員で茶碗などいろいろな道具を準備し、和室に釜（五月

～十月は風炉、十一月～四月は炬）を置き、床の間に花を飾り、お菓子を用意します。花は季節の山野草が中心で、皆で持ち寄ります。お菓子は薄茶の時は干菓子や会員が旅行先などで求めきた珍しいお菓子を用い、濃茶の時は主として近くの田中清月堂の和菓子を用います。季節感に溢れ、とてもおいしいので毎回の楽しみの一つです。



準備が終わるとお手前のけいこに入ります。五月～十月は風炉のお手前、十一月～四月は炉のお手前を行います。会員が四人ということもあって、一日のけいこで四人全員がお手前できます。それぞれのお手前の時残りの三人が客をつとめ、たてられたお茶を飲みます。客は正客(主賓となる客)、次客などでそれぞれ作法が異なります。一日のけいこの中でお手前と客の両方を行うことにより一連の流れがよく理解できます。さらに、折にふれ四方棚等の棚を用いたお手前などを取り入れ、一年を通して変化に富んだお手前を楽しむようにしています。

れるお茶会に全員で参加しています。このお茶会では裏千家、不白流など表千家と異なる流派のお手前や立礼（卓と椅子を使ってお茶をたてる）のお手前を経験できとても楽しいです。

このところ新型コロナの影響でけいこを行うことが少なくなっていますが、できる時は最大限の感染防止対策を行ってお手前をしています。

釜の会は、ささやかな会ですがとても楽しい会です。見学なども自由にできますので興味ある方は一中地区公民館までご連絡下さい。



こんにちは。私共は一中地区公民館を活動拠点としております「一中水彩画クラブ」です。本会は、平成二十八年度公民館講座を経て結成されました絵画同好会で、主に水彩画の制作について学びを深めております。

お陰様で長く活動をさせていただきまして、結成当初は、絵画の基礎となる鉛筆写生から絵具の彩色技法を、実践を重ねて学び得ることが重点となっておりましたが、今では、

培った基礎力を活かし、自身の表現についてより深く追求するべく応用へと進展。その内容には、写生や彩色の技法に留まらず、紙や絵筆、彩色に用いる画材も選択する「自己表現」の絵画制作へと発展を遂げております。

こうした上達の過程で、より大きな力を与えてくれたのは、公民館主催の文化祭でした。文化祭に作品の展示参加という目標をいただけることで、どれほど大きなステップアップとなったことでしょうか。描く技術から自己表現力を磨き、その先の目標として自身の作品を多くの方に見ていただくという、全ての体験を同好会活動で成し得ることが出来ました。共に切磋琢磨する仲間の作品も立派に額装されて、皆の晴れ姿が揃つと、喜びもまた一入でした。

この歩みで今後の進展へと期待高まるさなか…今日の未曾有の事態を迎えてしまいました。

活動状況は一変し、仲間が顔を合わせることも、学び続けることも出来ない今を、どう受け止めて良いのか、正直わからないことがとても辛いです。

幾度も自粛を要請されて見えぬ終わりに、それでも再開を願って今を

過ごさねばと、皆模索していることでしょう。今まで通りに戻ることはもう出来ないと思います…しかし、これまで培った技術や味わった楽しさは消えることはありませんし、仲間との絆も、絵を描き続けることで必ず繋がっていられると信じております。

く発生していました。数年前にバイパスが四車線に改良され本線に合流する加速車線ができて一時停止しなくともスムーズに合流できる構造になりました。



最近、側道から本線に合流するとき一時停止しないで本線に合流する箇所が改良されて渋滞する箇所が少なくなってきました。今までは合流する道路では本線に合流する直前に一時停止が通常でした。

そのために交通量の多い箇所（例えば、土浦学園線から国道六号バイパス線の下り線に入る箇所・県合同庁舎先から六号バイパスの上り線に進入する箇所など）では、常に渋滞が起きその手前の交差点では進入ができず信号数回待ちや追突事故が多

しかし、以前と同様に一時停止をする車があり、渋滞を引き起こしています。また、改良後の合流に不慣れなためか徐行してしまい、後続の車が速度を落とさざるを得ないことが起きています。加速車線ができたので、加速してから本線に流入すると後続にも迷惑をかけずに済みま

す。その際には本線の車両に妨害を

かけないことが必要です。合流をスムーズにするためには、本線に入る前に本線の交通状況を把握し、ウィンカーをだして加速車線で速度を調整しながら合流しましょう。ただし、本線は優先されますので、その際には自分や本線の目の前の車両には十分注意が必要です。加速していますので追突する危険があります。合流したらタイミングをみてハザードランプで本線の後続車にお礼の挨拶も忘れずに。これで本線の車は安心して走行することが出来ます。

このような合流する地点は、運転者が一番神経を使うところです。本

線が優先で有るので呉々も優先順位を怠らないように。本線の車両も合流地点では、お互いにスムーズに進行できるように交互に走行しましょう。また、本線の車両は、センター側が空いているときには車線変更して、加速車線から本線にスムーズに入りやすくしたいものです。

呉々も安全運転に心がけましょう。

コロナ禍がもたらした変化

中央二丁目 塚原 郁乃

新型コロナウイルスの影響、中でも特に大きな変化を強いられたのは乳幼児から小学生くらいまでの子供を持つ世代なのではないかと感じます。

学習方法、遊び方、働き方の変化によって生じた暮らしの変化。どの家庭をとっても、全く同じ環境は無く多くの迷い、ストレス、決断と孤独感さえ感じる事もあったかと思えます。

そんな中「ソーシャルディスタンス」等でできた色々な人との「距離感」は、大切な気付きにも繋がる事となりました。今では多くのオンラインツールで便利にコミュニケーションをとる事も出来ますが、やはり

「リアル」での感じられる感情、表情があります。当たり前の様に、すれ違った時に交わす挨拶やちょっとした会話の大切さ。遠距離でなかなか会う事を先延ばししていた人との会えないもどかしさ。「ママ友」との些細な会話をする時間の大切さも、改めて気付く事も出来た期間でした。

子育て中は特に、多くの情報共有が必要です。「育成会」等で出来る情報共有もとても支えになっております。しかし、日常働きに出ている家庭も多く、日々追われ見えない事も多くあります。幅広い世代で、情報共有でき、地域の安全に子供の安全を守っていかれたらと、思います。

子ども達は純粋で、敏感です。コロナ禍に関わらず、私達大人の「笑顔」が子供達にとって一番の安心となっている事にも改めて気付く事が出来ました。

楽しいバレーボール

桜町四丁目 五年生 川田あかり

私は三年生の頃からバレーボールをやっています。

お母さんがバレーボールを楽しそうにやっていたことがきっかけで、私もできるようになって仲間に入り

たいと思い少年団に入りました。

お母さんは、自分が□出しをしてしまうからできればバレーボール以外のスポーツをやってほしいと言っていました。が、体験に行ってみたらやっぱり楽しいと思ったので、□出しされてもいいからやりたいと言い入団することになりました。

もともと遊びでバレーボールを使ってキャッチボールをやっていたので、パスやサーブができるようになるまでたくさん練習しました。

全然できなかったパスができるようになって、少し続けられるようになって、もっとたくさん続けられるようになりたいと思いました。そして、全然入らなかったサーブも入るようになって、もっと強いサーブを打ちたいと思うようになり、どんどんバレーボールが大好きになっていきました。

でも、四年生になって新型コロナウイルスの影響で練習も大会も中止になり、チームの仲間にも会えなくなりとてもつまらかったです。少しずつ練習試合や大会ができるようになって、コロナの影響は続き、練習前と後の



手洗いと消毒、ボールやネットなど道具の消毒、体育館の換気、練習や大会前の検温など新しくやらなければいけないことが増えました。監督やコーチはマスクを着けての指導となり、暑い時はとても大変だと思います。

どのチームも同じ状況で大変な中、今年六月に新チームとなって初めての公式戦がありました。結果は予選リーグ敗退となり、そのうち一試合は逆転負けとなってしまいました。

一セット目を公式戦で初めて勝てたことがうれしくて油断してしまい、二セット目を取られ、その後も自分たちのミスも増え負けてしまいました。とてもくやしかったです。

私は大会後もっと強いサーブを打つという目標を立てて練習にはげみ

ました。

その約一ヶ月後に前回逆転負けした相手とまた対戦することになりチームみんなで絶対に負けないと決めて粘って粘って今度は逆転勝ちしました。最後の一点は私のサーブが決まって勝てたことがとてもうれしかったです。

今また練習が中止となつてしまつたけど、練習が始まつたらもつと頑張つて上手になりたいです。あと、五年生が二人だけなのでもつと増えたらいいのにな、と思つています。

一中地区公民館

職員紹介



主事

根本 明宗

今年度の四月より市役所市民活動課から一中地区公民館に異動してまいりました根本と申します。

私が公民館に異動してきまして早くも半年程が経ちました。その間に新型コロナウイルス感染症の影響で数度公民館の貸館が休止となりました。前例のない状況に置かれる中で、公民館の開館日においても、利用団

体の方々には感染症対策を徹底した上での活動をお願いしてまいりました。厳しい状況下でもコロナ禍において、同好会・サークル等の活動を継続することは、日頃のストレス負荷の解消や気の置けないコミュニティの維持にとっても必要なことだと考えております。

公民館を利用し、楽しそうに活動する方々を見ていますと、私も大変に元気が湧いてきます。こういった状況だからこそ、公民館が生涯学習施設としての場のみならず、コミュニティセンターとして、人と人とのつながりの場として、より重要となつてきていると認識する日々であります。

コロナ禍の終わりが見えない状況ではありますが、公民館・コミュニティセンター職員として、より良い公民館を目指してまいりますので、よろしくお願いいたします。



社協中央支部職員

川崎 麻由

本年四月に土浦市社会福祉協議会中央支部に着任し一中地区公民館で勤務しております。

土浦市社会福祉協議会では、誰も

が住みよく安心して暮らせるまちづくりを目指して、各種支部事業を行なっております。支部事業におきましても皆様には温かいご支援とご協力をいただき心より感謝申し上げます。私は昨年度まで都和公民館に勤務しておりました。

公民館の業務は地域の方と接する機会が多く、地域の方と協力して行なうまちづくりにやりがいや楽しさを感じておりました。

私の公民館での仕事は福祉の相談窓口と支え合いの地域づくりの推進です。

公民館には日々様々な世代の方からの相談が寄せられます。

一中地区でもお一人おひとりの困りごとに向き合い、より住みやすい地域にするにはどうしたらよいかを地域の皆様と一緒に考え取り組んでいきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

「まごころ」を届けています！

70歳以上のひとり暮らし高齢者や支援が必要な方の安否確認や孤独感を解消していただくため、毎月第2・4水曜日にボランティアサークル「たまき会」の方がまごころ込めて作った弁当をお届けしています。

お弁当作りに興味がある方は、一中地区公民館(824-0104 担当：川崎)にお問い合わせください。



短歌

秋彼岸の時をたがえずあかあかと野に一斉に曼殊沙華咲く

井上 寛江

「八年ぶり中秋の満月見よ」と丁巳し皓皓たるや今宵賢治忌

櫻井 雅江

秋風のさらさら渡る林より只ひとたびの雉鳩のこゑ

瀬古澤 和子

風渡り暫しなごみの鳥たちよV字の水脈に無事を祈らん

斎藤 順子

虫の音に誘われ君と草原に肩を寄せ合う月の無い夜

桑田 今日子

編集後記

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、緊急事態宣言が相次いで発出されるなど今年もコロナ禍に振り回され、あつという間に一年が過ぎてしまいました。

各種イベント、祭礼が今年も中止となり、恒例の「一中地区公民館まつり」も開催できずに残念です。

まだまだ収束は難しいようですが、感染力の強い変異株に変わり感染経路が判明できないのが現状のようです。

一人ひとりが注意を重ねて外出も控えて、三密・手洗い・マスク着用に心がけましょう。

そして、冬には収束し新たな年を迎えられることを望んでいます。

皆さん辛いでしうが挫けずに頑張らう。

さて、こうした中に於いても皆さまでに寄稿を頂きまして、編集委員一同心より感謝申し上げます。

(Y・A)

(本号の編集担当者)

新井 幸男／田中久美子
石川 幸子／梅木 逸夫
岡部 恒文／小野村一博
加藤 節子／佐藤 春治
進士 武之／宮口 五郎
山本 敦子／横山 光栄